



麿作幽靈法廷

tontokaimo39

ネタバレがあります、赤川次郎「幽霊法廷」 横溝正史「本陣殺人事件」 ホームズものの「ソア橋」をまだお読みになってない方は、この編はお読みにならないことをお勧めします。

賈作幽靈法廷

「この本ね、探してたのが手に入ったの、明日は図書館に納めるのだけど、夕子どう思う？」

「ふうん『幽霊法廷』か、どうって？」

「これに出てくる女性って酷いのよ、友人の頼みのために自分の恋人を騙すの、友人も大切だけど恋人より優先だなんて……」

「ああ、それは私も読んだが、友人のためだけでなくその恋人のためにと言うことじゃなかったかな」

「あら岸本さんもう読んでるの、だったらこの恋人の男性、騙さないと頼みを聞かなかったと思う？絶対にそんなことはないわね、騙す必要などどこにも無いじゃないの」

「ううん、そう言われると確かにそうだな」

「それにね、友人が誘拐されてるのにお見合いに浮かれて、おかげで最後のオチは解ってしまったけど」

「うん、私もおかしいなと思って読んでいたらその通りだった」

「で、その最後がまた酷いのよ『図ったな!』と怒る恋人に、謝るのかと思ったら『貴方のためよ!』と恩の押し付け、もし男性に少しでもプライドがあれば、二人の関係はそこでお終りだと思うけど、ねえ岸本さん、もし貴方がこんな状況だったらどうする?」

「うん、私ならきっぱりと別れてるだろうな」

「そうよね、それでこそ男、だから貴方が…フフ、それに安心してね、私だったらこんな酷いこと絶対にしないから!」

「うん、淳子君なら信用できる」

「ねえ、これって誰か二人をいじめる会なの、それとも誰かさんお二人のおのろけの会?」

「フフフ、ごめん!夕子と宇野さんのアツアツを見てたらつい意地悪したくなって」

「よく言うわ、それどちら様のことかしら?」

「フフ、あつ、まじめな話、宇野さんなんだか元気がないわね、お

体の調子でも？」

「恭一、健康なら心配ないわ、昨夜の張り切りよう…あつ、こら何を言わせるのよ」

「キャハ！岸本さん聞いた！」

「い、いや…私は…」

「バカ！岸本さん赤くなってるじゃないの、恭一、きっと事件の捜査に行き詰まってるのね」

「あら、夕子に話せばいいのに」

「この人ね、変なところにプライドがあつて、困ってても話そうとしないのよ」

三人して好き勝手なことを言ってくれるが、プライドなど関係は無い、折角の二人だけの時間に、何も事件の話などしなくても思っているだけだ、しかし行き詰まっているのは事実、今朝も課長に尻をたたかれたばかりなのだ。

「あら、どんな事件、岸本さん知ってるでしょう」

「ええ、殺人事件ですが詳しくは…一課は今少し面倒な事件を抱えて全員で総がかり、宇野さんもそうなのですが、『掛け持ちさせてすまんが、この方は原田と二人でやってくれないか』と課長に言われてましてね、だから宇野さんと原田さん、今は他の人の倍の苦勞をされてるのですよ」

「ふうん、そうだったの！」

「宇野さん、課長さんに信賴されているのね」

まあ、信賴されているのは嬉しいが、うまく行かないとそれだけよけいに気が滅入ってくる、今夜は夕子と二人事件のことは忘れてと思っていたところへ現れたのが淳子と岸本のカップル、ただこの二人なら嫌な相手ではないので話は弾んだのだが、どうもおかしな方向へ進んでしまっているのだ。

「ねえ、どんな事件？教えてよ！」

事件と聞くと途端に生き生きしてくるのが夕子の悪い癖だ、こんなともう話さないわけにはいなくなる。

「うん、見かけは単純な事件だ、男が一人公園の横の道端で死んでいた、首にロープのような物でできた痕が残っていて、検死でも絞殺と断定された、財布を持っていたが、金に手を着けられていなかった。だったので物取り目的の犯行とは思えない、この財布のおかげで身元はすぐ判った、妻と二人暮らし、子どもはいない、二年前勤めていた会社が倒産し、職探しとアルバイトの毎日だったと言う、元の会社の同僚だった者たちにも容易く会うことができた、ここまでは順調ですぐ解決できると思ったんだが：

ところが元の同僚たちもバイト先の者も、被害者を悪く言う者は一人もいないんだ、みな『おとなしくてまじめな男だった、彼を憎んでいた者がいるなど考えられない』と言うんだな、口先だけで言っているのか本心そう言ってるのかは、まあ長年の感で判る、みな

本心そう思っているらしい、普通被害者の周辺を洗えばなにかの糸口が掴めるものだが、これがまったく掴めないんだ。

ただ一つ気になることと言えば、三千万の保険に入っていた、職探して妻はパートの勤めと言う生活にしては多すぎる、受取人は妻、当然妻の周辺も洗ったが、これも男と同じだ、のみならず彼女にはアリバイがあった、男が首を絞められたらろうと思われる時刻は発見の前日午後十一時前後、彼女はこの頃勤め先で、数人の仲間といっしょに片付けや掃除をしていた、平凡な主婦で男関係など考えられず、夫婦仲もよかったと言う、要するにまったくの行き詰まりだ」

「ふうん、宇野さんそれで悩んでるのね」

「まあな、原田も苦労してるんだが…」

「ねえ、それって『本人殺人事件』じゃない？」

「夕子、何それ？正しくは『本陣殺人事件』でしょう」

「さすがは司書の卵の淳子女史、でも本人でいいのよ、要するに自

殺、普通の自殺と違うのはね、殺されたように見せかけて自殺する、

自分で自分を殺すのだから『本人殺人事件』よ」

「こら、卵は余分よ」

「殺されたような自殺だと、どうしてそんなことをする？」

「理由はいろいろあるわ、この場合は保険金ね、保険金は自殺では支払われないの、でも殺されたとなると払われるので、奥さんにそのお金を残したかったのじゃない」

「そうか、しかしそんなことはできそうにないぜ？」

「例えばね、ナイフのような刃物で刺されて死んでいた、刺された場所が背なんかだったら自殺は無理だけど腹だったら自殺の疑いも残るわね、でもその凶器がどこにも無かったらどう、誰だって犯人が持ち去ったと思う、だから間違いなく殺人だよ」

「なるほど、しかしどうやって？」

「ホームズにあるわ、あれは拳銃自殺だけど、拳銃に紐と錘をつけ

て、錘は橋から川に垂らしておく、自分を撃って手を放せば、銃は錘に引かれて川の底へ、それを複雑にしたのが淳子の言った『本陣殺人事件』よ」

「なるほどナイフならやれそうだが、この事件は絞殺だぜ、」

「ロープは残ってなかったんでしょ、そこが『本人殺人事件』で大
事なところよ」

「ロープに錘をつけて川の中へか、川など無かったぜ、首を絞めて
おいてどうしてロープが消せる？」

「そうね、夜は人通りもなく街灯もない暗い道、公園の脇道などび
ったり、で、それからいつも車が止まるけどその車はすぐ発進する、
と言ったようなところを探すのよ、ほら夜のうちに商品を運び出し
たり、逆さに納めたりする車はよくあるでしょ、その車の後ろにロ
ープを繋ぐ、一方の端は自分の首にぐるぐる巻いて寝転がっている、
運転手はそんなことは知らずに発進、ロープはピンと張って首を絞

めるがやがて車といっしょに」

「なるほど、夕子さんうまいこと考えますね！」

「フフ、でも岸本さん、これ本当はだめなのよ」

「えっ、どうしてですか？」

「独楽に紐を巻いて引くと回るでしょう、まあ人の体だからくるくるとは回らないとしても同じような力が働くわ、すると首だけでなく顎や顔にも擦り傷がのこるはず、恭一、男にそんな傷あったの？」

「いや、首だけだ」

「ほらね、首に巻いただけでは窒息する前に解けてしまうわ、ほら西部劇によくあるじゃない、悪者を吊るすときに使うのは、先端にだんだんと締まっていく輪をつくったロープ、あれよ、あれでない
とだめなのね」

「でもそれじゃあ車から身体が離れないじゃないの」

「そう、だからこの説はだめなのよ」

「ふん、『本人殺人事件』は成り立たないわけか」

「そう、被害者の男性は飲み屋でお酒を飲んでいて、何軒か梯子をした後、最後の店で隣に座ってた男と意気投合したのね、店を出た二人は肩でも組んで歩いてたのじゃないかしら、ところが酔っ払い同士でしょう、些細なことで喧嘩になり、かっとなった相手は持っていたロープで被害者の首を絞めた、被害者が倒れたので相手は怖くなってロープを持って逃げてしまった」

「なんだと？」

「あくまでも仮説よ、でも知らない者同士の喧嘩だったら、元の同僚など被害者の周りをいくら洗っても何も出てこないと言うこと、居酒屋の方も見込み薄ね、最初は馴染みの店に入るものだけど、梯子をしてるとしまいには大抵知らない店に入ってしまうものでしょ、店の方も初めて現れた客の顔など覚えていない」

「それじゃあ手の打ちようがないじゃないか」

「そうよね、だから無駄な捜査を続けるより、もう一つの大事な事件と言うのに力を注いだ方が」

「しかし、人一人が死んでいるんだぜ、それを無視するわけには……」
「それはそうね、でも自殺だったら仕方がないでしょ、本当を言う」と『本人殺人事件』成り立たないわけでもないのよ、西部劇の首吊りに使うロープの結び方、あれとそっくりに見えるけれど、あるところまで絞まったらぱらりと解けてしまう結び方があるの、マジックでよく使われるわ、普通の者はそんなもの知らないだろうと思かも、でも逆に、知っていたからこそその手を使ったとも言えるわ」

「ううん……」

「それにね、面倒なことをしなくても、自分で首を絞めてしまえばどう、ロープは結ばれていないから、引かれると簡単に車と共に去りぬよ」

「そう言えば、そんな事件がありましたね、留置場の中で自分で首

を絞めて自殺してしまった、警察の落ち度だとたたかれたのですけど」

「そう、その気になればできないことはないのね、これなら車でなくて犬でもいいわ、後で首にロープを付けた犬がうろうろしてても、どこかの犬が、ロープのまま逃げたなと思うぐらいで誰も変だと思わないし」

「そうか、しかし証明はできないな」

「当然よ、だから仮説だと言ってるの、ねえこんなのはどう？暗闇の脇道で、ある男が殺してやろうと相手が来るのを待ち構えていた、『来たな、しめた誰も見ていない！』と、飛び掛って首を絞める、

倒した後ライターで顔を見ると『しまった！人違いだ！』これも被害者の周辺をいくら洗っても何も出ないわけでしょう、それに近頃、誰でもいいから襲ってみたかっただけという事件もよくあるし」

「おい夕子、いったい何を言いたいんだ！助言のふりをして混乱さ

せるつもりか…」

「フッフ、淳子の持つてる本『幽霊法廷』よね、法廷だから裁判長の判決を、かたや『本人殺人事件』一方は『別人殺人事件』ここでの別人は、あかの他人のことなんだけど、さて恭一裁判長殿、判決はどっち？」

「おいおい、ううん…そう、そう言うことか！『本人殺人』は奇抜過ぎる、『別人』の方だ」

「恭一、判ったの！」

「こ、こら！突然キスするな、淳子君が驚いてるじゃないか、岸本はまた赤くなっているし」

「いいじゃないの、さっきのお返しよ、でも『別人』となると捜査を打ち切るわけにはいかないわね…」

「いいさ、まあ課長がどう言うかだが、どう言おうと知ったことか」

「そう！ありがとう恭一！」

「お、おいこらまた！」

「ねえ岸本さん、この二人何してるの？」

「何でしょう？じゃれあってるのだけは確かですが…」

今夜は夕子と二人だけ、だから事件の話などと思うもののもうしても話題はこれになってしまおう、まあ、現役女子大生と四十男の間に、事件以外の共通話題などそうあるはずが無いのだから、ただし最初にこれを持ち出すのは決まって夕子の方だ。

「ねえ、課長さんどう言ったの？」

「うん課長には、夕子と同じことを話した、『本人殺人事件』と『別人殺人事件』の双方だ」

「すると課長は『おい宇野、あれこれうまいことを言って捜査から降りたいんじゃないだろうな』と来た」

「あら…」

「ところがうまい具合に一人の男が出頭して来てくれた『私は閉店後の店に翌日分の商品を配って回ってるのですが、ある店の前で車を発進したところ、妙な抵抗を感じたのです、数メートル進んだのですが気になって引き返したところ男が！』という話だ」

「おい、それはいつの事だと聞くとあの『本人殺人事件』のことに違いなかった、夕子、ビンゴだ！」

「ふうん、やはりね」

『男は死んでいました、すぐ警察をとったのですが、私の車の後ろに変なロープが付いてるじゃないですか、これはかかわりあいになつては大変だと今日まで黙ってたのですがやはり気持ちが悪くなつて、いや私が殺したんじゃないよ、私は何も知らないです』
と言うことだ『そうですか、わざわざ来ていただいてご苦労だった、しかしあの事件はもう解決済みですから、貴方が心配されることはまったく何ありません、おい宇野、お茶でも手配しろ』これはそ

ばで聞いていた課長の言葉だぜ」

「えっ、じゃあ課長さんも！」

「うん、念のために検死の報告書を見直してみた、あの男癌を患っていた、それを妻には内緒にしていたんだ、ところが課長『一課の見解はあくまで殺人だ、殺人事件である以上捜査を中断することはできん、宇野、おまえは続けろ、原田は降ろすから代わりに夕子君と二人でだ、期限は三日、二人でどこでどんな捜査をしようと俺は知らん、夕子君によろしく』だとき、それから『原田には休暇でもやろう、例の事件も目処がついた、二人には掛け持ちをさせ苦労させたからな』と言うことだ」

「そう、課長さん思いやりがあるのね、素敵！」

「おい夕子、課長に跳びついてキスはするなよ、俺はいいが課長あれで結構奥方が怖いんだ」

「そうなの、でも課長さんやさしいし、恭一も同じね！」

「それを言うなら一番は夕子だ、ただそのくせ時々酷いこともするが……」

「え、私が？ あっあのこと？ 岸本さん『私だったら別れてる』って言ったわね、恭一もそう思った？」

「ああ、夕子とあの友人が改めて謝って来なかったら、もう今日ここで会っていない……」

「ごめん！ プライドを傷つけてしまったのね……」

「いやプライドと言うより寂しかった」

「えっ！……ごめん恭一！」

「こ、こら跳びつくな！ この前このマスター呆れ顔で見てたんだぜ、見ろ、今度はポカンとして、カップ磨くのを忘れてる」

今回は超短編です。

真作「幽霊法廷」の夕子、あまりにも酷いのです、それに宇野も、警部のプライドどこへ行ってしまったんでしょう？

これでは夕子ファンとしてはどうも...と、言うわけでこの編を書きました、ファンとしてはこんな夕子であってほしいと...

ここに登場あする地名、人名などは全て架空のものです、もし同姓、同名の方がいましてもまったく関係ありません。

幽霊法廷

<http://p.booklog.jp/book/95053>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95053>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95053>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ